心造少女　2

第二章

「助けて下さい。――どうか、助けて、踊り続けなければならないので、
私は中へ入ることができないのです」と少女は言いました。
すると、処刑人は言いました。
「お前さんは多分、私が何者かを知らないのだろうな。
私は斧で、罪人の首を切落とす役人だ。
ほら、私の斧の鳴る音が聞こえてくるだろう」

（ハンス・クリスチャン・アンデルセン『赤い靴』より）

1

マイヅル。

それは現在においては数少ない、海岸線の近辺に栄える都市の一つだ。

時代を遡りおよそ二世紀以上を前、二度に渡って発生した、世界を巻き込んだ

激しい戦争。マイヅルは当初、その軍事的要地として重用された土地である。そしてとある事情により、当時の軍港は長い時を経た現在にあってその姿形の多少は違えつつも、変わらず陸土防衛の要としての役割を大いに期待されている。

その事情、――約七〇年程前に、突如現れた災厄。

海原を蹂躙し、陸地を侵犯し、殺意をもって人とその文明を破壊する怪物。

それが人の世に現れてから、海上防衛はその意味するところを転換した。それまでは国対国、人対人の間で交わされた約定の下、かろうじて維持されていた平和の楔。それは破壊をもたらす獣性によって、儚くも打ち砕かれた。

かくして、突然の幕を上げた人と獣の戦い。

当初はまるで、機械化された大型海獣の如き個体が散発的に出現し、人や船、小さな島を襲うだけだった。人類は多くの人的・産業的被害を被ったが、それだ

けならば、大局的に見ても大した脅威ではなかった。いくら怪物といえど生物である以上、人の造りし火器兵器の類は通用する。単純な行動原理しか持たない彼らに対して、当初の人類は長い歴史の中で培われた知恵や戦術により、大きく有利を取っていた。

だが人類は、もっと早く気がつくべきだった。

この怪物が、――いくら駆除しても現れ続ける、どこの系統樹にも属さない新種の獣が、今まで人類が相手取ってきた害獣の類とは全く性質を異にするものであることに。

本当の脅威は、時を経て顕在化した。

とある作戦の最中、獣を駆除する人類の艦艇の一つが、海中に忽然と姿を消した。

それに続くように、一つ、また一つと、艦艇は海の中に消えていった。

そうして艦隊の一角が、まるごと海の中に消えた頃、人々はようやく、何が起きているのかを理解した。

それは獣を駆り立て、殺す為に人類がとり続けた、普遍的な戦術の一つ。

自分たちが今まさに、その術中に陥っているという、戦慄すべき事実を。

駆除する者と、される者。

立場を逆転した包囲網からの、命からがらの生還。

彼らのその恐るべき報告により、人類は害獣への態度を改める。

深き海に棲まう艦、――深海棲艦。

それが人と、その被造物に襲いかかる理由は未だ不明だ。現在でも様々な原因が推定されているが、どれも憶測の域は出ない。ただ確かなことは、この深海棲艦には、人類の行動を模倣し、真似ぶ厄介な性質があるということ。

そしてそれは戦術のみならず、武装にまで及ぶ。
はじめは衝角突撃にも似た、単純な体当たり攻撃しかしてこなかった深海棲艦。
彼らは人類がその駆除に砲撃を使用し始めてから暫くして、その身体に砲門を形成し、それを行使するようになった。
魚雷を使用すれば魚雷を。
艦載機を飛ばせば艦載機を。
機銃を使用すれば機銃を。
人類にとって幸いだったのは、それが誘導飛翔体（ミサイル）や化学兵器、それを超える大量破壊兵器を持ち出す前の気付きであったことだ。
果てなき進化的軍拡競争により、終末への針を早める愚を犯すより前に、人類は深海棲艦へ立ち向かう術に、基本的原則（レギュレーション）を設けることとした。

だがそれは、来るべき終末の日を先延ばしにしただけに過ぎない。
狭められた選択肢の中での、海という広大な工場から無制限に生み出される、学習変異する自動機械との戦い。その単純な物量を前に、量的資源に劣る人類は先細る運命しか残されていない。それはこれまで数多の神話で予言されてきた、黙示録（アポカリプス）を彷彿とさせる途方もない事態。人類史上に突如生じた、回避しようのない破滅的状況に、人類はもはやこれまでとその膝をつきかけた。
だが、人類には未だ一つの希望が残されていた。
妖精式解析機関（フェアリーエンジン）。
第二次情報革命により、巨大な液体記憶媒体（コモンメモリ）と化した海から、膨大な情報資源を抽出する為に人類が考えだした、最も遠回りで、最も確実な手段。
幾億年の歴史を語らせ、紡がせるために生み出された存在。

海から汲み上げた情報を抽出・解析・編纂・記録する機構。
ただそれだけを、ひたすらに、繰り返し続けるだけの機械。
その機械は、深海棲艦が現れるはるか以前から、その四つの迂遠な作業を繰り返し続け、地球という井戸から数多の膨大な情報資産——天然資源の所在、地殻・気候変動や星々の運行の記録、生命の秘密に関する手がかり、人類史上の隠された真実を、——汲み上げて、人類にもたらした。
そして幾度となくその機能を改良され、拡張され、革新されたその機械は、やがて世界で唯一の、最も偉大なる情報処理能力を持つ、解析機関となっていた。
その機械に、人々は解答を求めた。
我々はこの先、どのようにして生き延びるべきかと。
悠久の過日を遡り続ける知性に対して初めて投げかけられた、明日への問い。

かくして、星詠みの妖精機関（フェアリー）は神託を下した。

その結果、

――神託に従い、襲い来る海の脅威に抵抗を続けた人類の勝ち得た成果。

海沿いの都市に広がる、無数の大型建造物。

都市に存在する軍需関連組織、企業、それらがもたらした数多くの利潤。

最初の遭遇から約七〇年の時を経ても爛々と輝く、夜の街に灯る無数の光。

その光景を一望することが出来る、周囲のそれより頭一つ抜けた高層ビルの屋上。そこに設えられたヘリポートに、奇妙な物体が鎮座していた。

それは一見すると、箱だった。

大型の貨物用エレベータ程の大きさの箱。幅、高さ、奥行きの揃えられた、サイコロのような真っ白なキューブ。――もし器具を用いて計測すれば、それが本当にコンマ数ミリの精度で構築されていることが理解できる正立方体。敷地の中央に座している為、このままではヘリの離着陸でさえ出来ない。

明らかに周囲の物体とは別の存在感を放ち、元々この場所にあったものとは到底思えない奇妙な箱。

その箱の側面に、不意に、切り込みが入る。

その切り込みは三度入る。そしてその白亜の表面に、人一人が通れるくらいの扉の形が刻まれて、想像の通りに内側から外へ、その扉はパタリと倒れる。

そうして箱の内側から現れたのは、四人の人影だ。

いずれも、揃いのコートを羽織った女性。

だがその殆どがティーンエイジに見える容姿。
そのうちの一人、一際背の高い女が周囲を見渡す。
「着陸した。由良、ナビゲートを頼む」
その言葉とともに、彼らの背後にあった白いキューブが、淡い光を放って姿を消す。まるでそこには最初から何もなかったかのように。彼らは背後で起きたその現象に何の関心も表さず、連れ立って屋上を歩き出す。
そうして辿り着くのは、このビルのエレベータだ。まるで彼らが到着するタイミングを知っていたかのように、無人の箱が二基、口を開いて出迎える。
彼らは予め示し合わせていたように、ふた手に分かれてその中に乗り込む。
そして彼らが触れるよりも早く、操作パネルの階数ボタンが点灯する。全員が乗り込んだのを確認すると、女は不意に、右腕に嵌めていた黒いアームカバーを

引き抜いた。
その下から現れるのは、ただの腕ではない。
手の甲には羅針盤の意匠のシンボルマーク。剥き出しの鋼鉄が垣間見えるその指先が放つのは、肉食獣の牙を思わせるように鋭く、黒光りする鋼鉄の輝き。
次いで、女の左手が自身の顔に触れる。
すると手を離した後、その左眼から金色の燐光が溢れだす
それは軌跡を残す金の燐光。
それは狼の顎を思わせる腕。
仕上げに操作パネルの表示が、通常運行から点検運行モードに切り替わる。
「それじゃあ、作戦を始めようか」
戯けるような女の言葉とともに、エレベータは降下を開始した。

＊

同じビルディングの高層階。宿泊客用のゲストルームよりもさらに上のフロア。最上階に近い階層に、このオフィスビルのオーナーのプライベートルームが存在する。

「ハレルヤ（哈利路亞）！」

窓から見える絢爛たる眺めに、上機嫌にそう呟いたのはこのビルのオーナー。その手の金持ちが着るようなナイトガウンに身を包む中高年に差し掛かった男。

浅黒い肌に、刈り込まれた白髪混じりの頭。髭を蓄えたその笑みはこれまでの人生に対する自信に満ちており、その目は威厳というよりも野卑な威圧感に満ちていた。中年太りの兆しが見えながらも、レスラーのようなその生まれつきの骨太で筋肉質な身体は彼と対峙する者に、本能的な恐怖心を与えることに十分な働きをしていた。

同業者から鳥籠男（ジェイルマン）の呼び名で知られている、理性よりも腕力によってキャリアを重ねていくタイプの荒々しいボス猿。鳥籠（ケージ）よりも監獄（ジェイル）が相応しい、支配を生業（ジェイルマン）とする男。

そう狭くない部屋の中には、ところどころ彼の呼び名通りの鳥籠（ジェイル）のようなものが、この手の人種が好むその金額の他に価値を知らない美術品やインテリアとともに点在している。そしてその中には小人のような姿があった。それを背に、彼

はその巨大な身体を窓際のソファチェアに投げ出して、ゆっくりと太い手指でタンブラーグラスを傾けている。

事はすべて、順調に進んでいた。

先立ってようやく整った取引（ビジネス）きは、彼にとって非常に有利な条件で、滞りなく結ばれた。その御蔭で彼の財産はこれからも、ますます増えていくことが確約された。

眼の前の美しい夜景。

それに自身の輝かしき行く末を重ねながら、彼は無造作に空いた右手を伸ばす。

するとそこにすかさず、葉巻が差し出される。

先端をフラットにカットされた、彼の好みを熟知したもの。

それを差し出したのは、彼の太いソーセージを思わせるそれとは対象的な、陶

器細工のような白い小さな指先。

その手指の主は少女だ。まだ一〇代の半ばにも満たない容姿の、美しい少女。

彼と同じ色の少し大きめのガウン越しに垣間見える薄い身体。

少し水気を帯びた艶やかな栗毛が、淡い室内灯の橙色の光を照り返していた。

特徴的なのはその顔。澄んだ大きな瞳を湛える左眼の下、頬に刻まれた紋様だ。

鳥籠（ジェイル）のモチーフと数字の「4」を組み合わせた藍色の刻印。

それは彼女が男の近親関係にある存在ではなく、室内の鳥籠と同じ所有物であることと、その顔に陽の光を浴びるような生活を送ることが許されていないことを示していた。

彼が葉巻をつまみ上げると、少女は続けてマッチを擦り、先端に火をつけた。

彼の呼吸を知り尽くした、非常に慣れた手つき。

その卒なき所作に、満足気に頷きながら、彼は葉巻を咥えて煙を吸い上げる。少女はマッチの火を消すと、その子猫のような矮躯を彼の傍ら、ソファチェアの隙間に埋め、猫のようにその男に身体を擦り寄せる。

幼い少女を所有する彼の取引(ビジネス)き。

それは近年、さらにその市場を拡大する自律機械(オートマトン)の製造・流通・販売に関わるものだ。

人類の私生活を、あるいは仕事を、人生のあらゆる場面で補佐する存在。あるいは人類に成り代わり、危険な仕事を遂行する代理人。ほんの一〇〇年ほど前は夢物語だった存在も、現代ではいつの間にか商業的に一般流通し、当たり前の存在となった。

人型、動物型、植物型、無機物型、乗用、建築用、医療用、軍事用、愛玩用、

――あるいはその用途に従ったあらゆる形態のものが、今や世界中のあらゆる時と場所に普及し、あらゆる目的で用いられている。
その普及に一役買ったのが、件の妖精機関の神託だった。
――際限なき自動機械との戦いには、同じく自律機械を造り差し向けよ。
人工知能が提供する敵性生物の解析情報（リバースエンジニアリング）に従って、人類は対抗存在を製造し続けた。
彼はいつの時代も技術発展は、大きな二つの市場によって促進されると考える。
それは即ち、軍需産業と性産業。
その共通項は、どちらも人類の本能に深く関わるということだ。
前者は闘争本能に、後者は生殖本能に。
それらは脳髄の深くまで浸透し、理性を麻痺させ、剥き出し獣性を引きずり出

そうと蠱惑的な誘いをかける悪魔だ。半端な覚悟で関われば、破滅へと真っ逆さまに墜落する危険性を孕んでいるが、彼はそれらの危険を支配し、効果的に利用することで金を稼ぐ術を知っている人間だった。

そうして急速に発展した自律機械に関わる技術は、毒物が薄められて有益な薬物としての役割を得るように、常の例に従って、安全に転用でき得る上澄みの部分だけを掬い取り、一般市場へ流入した。

彼は当事者ではなかったが、その流入にいち早く関わることに成功し、墜落の臭いを嗅ぎ分けながらうまく立ち回り続けた。そして気がつく頃には、その市場でも顔の知れた存在となっていた。

そうして隙だらけのこの国の市場で、盤石な地位を築いた鳥籠男（ジェイルマン）が、ビジネスとしてさらに投資している分野。彼はその状況を確認する為に、煙を吐き出しな

がら少女へ視線を向ける。傍に控えていた彼女は灰皿を差し出しながら頷く。

「――、ク」

少女の喉奥から鳥の囀りのような音が響き、ソファチェアの正面にあるエアリアル・ディスプレイが、形を得て点灯する。バラバラの微細資源（フェアリースケイル）の粒子として振る舞っていたスクリーンセイバーモードからの移行。

そして映し出されるのは、音楽とともに放たれる七色のレーザーライトが暗闇を切り裂くダンスフロア。大勢の老若男女が集う店舗の配信映像。彼自身がオーナーであるこのビルの、地下に隠されたナイトクラブ。

その映像は、自律式の小型浮遊カメラが適切な角度でリアルタイムに撮影しており、少女が意のままに遠隔操作できるものだった。彼はタンブラーグラスをサイドテーブルに置くと、少女の肩に左腕を回し、その小さな顎を摘み上げる。

そしてまるでその顎をシフトレバーかのように強引に動かそうとする。少女はその動きに逆らわず、その意図するところを汲み、カメラを遠隔操作する。音楽に合わせて踊り狂う人々の間、あるいは頭上をすり抜けてカメラは移動する。

その途中、映り込む光景を鳥籠男は目ざとく観察する。

フロア内に点在するバーカウンター、あるいはボックス席。そこでアルコールやドラッグと等しく振る舞われるサービス。様々な趣向の扇情的な衣装を着た少女たちが、そこに身を置くお客様へ侍る。音楽と光で演出される退廃的光景。

カメラが行き着くのはその中央。そこには、ぽっかりと拓けた空間が待ち受けていた。

幾重もの観客の視線と、多重スポットライトが集中するその場所は、人類の本能に深く関わる見世物が繰り広げられる舞台(ステージ)。

その上に居るのは、二つの人影だ。
それは彼に顎を掴まれている彼女と同じ紋様を、その頬に刻み込まれた少女たち。
鳥籠男(ジェイルマン)によって風切羽を断たれた、幼き夜鷹(ナイトバード)たち。
男が顎に力を込める。少女はカメラを近づける。ステージの彼女たちを、その伸ばした手がギリギリ届かない程度、――申し訳程度の理性の境界、あるいは本能を最も煽り立てる距離から取り囲む観客たちの目線と同じ高さへ。
お揃いで頬に刻まれた鳥籠。
その数字は「1」が黒髪、「2」が銀髪。
赤い「十(プラス)」が刺繍されたキャップ。
看護師を模したワンピースを身に着けているが、そのけばけばしいピンク色の

ラバーめいた材質、要所を隠しきれていない過剰な露出は、明らかにモチーフが持つ本来の目的に即したものではない。

当初は軍需産業の要請に従って製造された、奇怪な少女型の自律思考戦闘兵器。

それこそが、件の妖精機関の神託の一つ。

艦船少女、あるいは艦娘と称される生体型自律機械。

その非合法な転用が、鳥籠男のビジネスの一つだった。

扇情的な音楽に合わせて、彼女たちはステージの上でステップを踏む。

観るものの本能に働きかけるように。肌を紅潮させ、流れる汗をフェロモンとともに撒き散らしながら、胸を逸し、身を捩り、腰を振り、尻を突き出し、その美しい相貌に蠱惑的な笑みを浮かべる。その度に、狂った獣のような吠え声が観客から湧き上がる。

モニタの脇に表示される数字の羅列、――彼女たちの淫らなダンス、その閲覧者から支払われる対価の総額が、カウントを跳ね上げる。

広大なコモンメモリの中で、無限に広がる多胞体構造のディープネット。

無数のバブルの重ね合わせに擬えられる、水底に等しい巨大な市場。

そこで配信されているこの映像は、醜悪な本能に働きかけるコンテンツの中でも、定番の一つだった。

少女は姉妹たちが消費される光景を、無感情な視線で眺めていたが、不意にその視線が揺れる。あわせてカメラの配信映像も乱れ、殺到する苦情（クレーム）の数を表す赤い数字が、モニタ上にポップアップする。

「集中（保持専注）しろ」

鳥籠男が低く、脅すような声を出す。

少女は身を強張らせながら、言われた通りにカメラ操作に集中する。

いつの間にか灰皿に置かれた葉巻。

それを摘んでいた男の右手は、少女のガウンの中に差し込まれている。

男の太い指が、少女の肌の上を撫で擦る。ガウンを剥がしていく。その下からは、モニタの中で彼女の姉妹たちが着ているものと色違いだが、同じデザインの黒い衣装が現れる。

男の指は無遠慮に少女の身体を弄り回す。自身の所有物のことを隅から隅まで知り尽くした手つき。少女はカメラの操作に意識を注ぎ込むが、男が用をなさない短いスカートを捲り上げて、滑り込んだ右手の指がその隙間をひっかき回すと、その腰が小刻みに震えながら浮き上がる。

従順な少女が徐々に頬を紅潮させ、荒い吐息とともに体勢を崩していく。

そうして男がよりじっくりと味わうべく、カメラを自動巡回に変更させ、少女の体を両腕で抱え上げた時だ。

サイドテーブルの上で発光。空中に緊急（エマージェンシー）を示す赤いアラートが投影される。

抱え上げられた少女が視線を向ける。

男が舌打ちをし、少女が「クッ」喉を鳴らし、通信端末を応答状態にする。

『――、お、オーナー』

「何があった」

焦りを帯びた部下の声。楽しみを邪魔された不愉快さ、悪態をつきたい気持ちを抑えながら彼は手短に問い質す。有事に時間を浪費することの無意味さ。それをわきまえていることが、彼がこの世界で生き延びてきた秘訣の一つだった。

『店の保管室（ストレージ）に侵入者です。まともな様子じゃありません。うちの商品を狙って

ます』

「入りこんだのは何匹だ。対応はどうしてる」

『四匹です。恐らく、海色機関の人形共です。五番から八番までの鳥籠を開けて、従業員も総出でかかろうとしています。客はどうしますか？』

「シャッターを閉めて、そいつらを保管室に釘付けにしろ。鳥籠は全部開けて、自己責任で足止めをさせろ。奪われるよりはマシだ。客はそのままにしておけ。一番と二番には状況だけ伝えてショーを続けろ」

彼はそういって、顔を笑みで歪ませる。

「お客様には何も知らせるな。なにせ何も問題は起きていないんだからな。そうだろう？」

『その通りです。オーナー』

オーナーの泰然とした態度に、部下の声は落ち着きを取り戻していた。
「代わりに俺が三番と四番を連れて行く。着くまで生かしておけ」
『了解です。オーナー』
通信が終了する。
男は少女を膝の上から下ろして立ち上がる。
先程まで熱り立っていたものは、今のやりとりですっかり冷静になっていた。
代わりに別の昂ぶりが、徐々に彼の脳を支配し始めていた。
「四番（スウ）、お前の姉を呼べ。俺の服を取ってこい」
少女・スウは頷くと、喉を鳴らしながら、部屋を飛び跳ねるように横切る。
男はガウンを脱ぎ捨て、首を鳴らしながらサイドテーブルの上、通信端末の隣に置かれている拳銃を手に取った。

彼の商売では欠かせない、九ミリのオートマチック式拳銃。

といっても銃自体には特別性はなく、その弾倉に目一杯込められた弾丸こそが、特別性の特注品だった。

具合を確かめているうちに、スウが戻ってくる。隣にはもう一人の少女。その容姿はスウと双子のように瓜二つだが、頬には鳥籠と「3」の紋様が刻まれている。彼女たちはその両手に不釣り合いな大きなアタッシェケースと、彼の着替えを手にしている。

「着せろ」

双子の姉妹は同時に頷き、ケースを置くと、それぞれ手に持つ衣服を彼に着せていく。いつも教えられている通りに、彼の肌に鳥が啄むような口づけを繰り返しながら。彼はその刺激に血を滾らせつつ、自身の財産を狙う輩への闘争本能を

昂ぶらせていく。

「行くぞ」

スーツを着込んだ彼は、彼女たちの衣装はそのままに、部屋を出てエレベータホールへ向かう。その途中で数人の護衛の部下と合流し、専用のかごに乗り込む。

保管室がある下層のボタンが押されて扉が閉じる。

広いカゴの中で、双子がアタッシェケースを床に置く。

そのロックを同時に外す。

プシュ、という空気が入り込む音とともにケースが開く。

姿を表した中身を、双子はそれぞれ装着、あるいはその手に握る。

三番の少女。その両手に握るのは、黒光りする拳銃によく似た武器。その正体は、艦船少女用に小型化された一二・七糎連装高角砲。そのバレルの側面には鳥

籠の紋様と刻印、――雷霆は害敵を屠り、鳥籠を守護する。The Thunder kills enemy for Jell.

四番の少女。その両手に握るのは、青龍刀を思わせる黒光りする刃。叩き斬ることを得意とする形。その正体は、対艦船少女用斬艦刀。その刀身の側面には鳥籠の紋様と刻印、――稲妻は獲物を狩り、鳥籠に持ち帰る。The Lightening hunts prey for Jell.

ハート型に露出した瑞々しい背中。双子のふっくらとした丸みを帯びた尻の上にある接続孔に、蓋をするように嵌め込まれた鋼鉄の機関(エンジン)が低い唸り声を上げる。彼女たちの身体へ、兵器としての熱量の供給を開始する。

生殖本能を煽り立てる扇情的な格好に、不釣り合いな凶器を構えた双子の少女。浮かべるのは鏡合わせのような表情。それは闘争本能に満ちた恍惚の笑顔。

我々の本分は戦うことにありと、望んでいた出番が訪れたことを歓ぶ顔。

「くッ、くくっ」

不意にサンが囀る。今にもだらだらと涎を垂れ流しそうな狂犬の顔。
「ク、クックッ」
釣られてスウも囀る。性的刺激を受けていた時よりも淫蕩な荒い息。
三番目の少女（サン・ザ・サンダーボルト）と、四番目の少女（スウ・ザ・ライトニング）。
鳥籠男のお気に入り。人形には不要な声を奪われた、少女娼婦の顔をした狂戦士たち。
その正体は、全身に様々な改造を施された艦船少女。
軍需産業と性産業の技術的複合（キメラ）の生み出した、生体型自律機械の落とし子。
待ちきれないと武器をこすり合わせ、かちゃかちゃと物音を立てる行儀の悪い二匹に、鳥籠男は「ステイ」と低い声で窘める。周囲に立つ護衛たちは、解き放たれた彼女たちが引き起こす狂宴を思い起こし、巻き込まれるのは御免だと冷や

汗をにじませる。

状況は逐一部下から共有されていた。スウが内蔵する通信機器によって中継し、彼が装着するイヤーカフ型デバイスから流れる音声情報によれば、侵入者は指示通り、保管室に釘付けにされている。

もしかしたら、先に解き放った鳥籠の方で既に片がついているかもしれないが、そうでなくとも到着次第、この二匹の獣を解き放てばそれで終わりだった。

恐らく保管室の商品はかなりの数が台無しになるだろうが、また仕入れをするより仕方がない。それよりも侵入者をどうしてやるかが問題だった。

ただ殺すだけでは駄目だった。

可能ならばすべて生け捕りにし、その正体と目的を明らかにさせねばならない。そして生きながらにその全身をバラバラにして、髪の一本から爪の先に至るまで

を勘定し、文字通りに身を以て、損失補填をさせてやらねばならない。それを一人ずつ行う。残りは鳥籠に閉じ込めて、自分の番が来るまでそれを見物させる。それが大胆にも彼の財産に手を出し、これに損害を与えようとした愚か者に対する彼の流儀だった。

部下の報告を聞く限り、侵入者には艦娘が紛れ込んでいるようだった。彼はもう一度拳銃の具合を確かめる。装填されている特別性の弾丸。それは本来、軍事組織で意に反する艦娘を処分する為に用いられる解体弾だ。艦娘の肉体は高濃度な微細資源（フェアリースケイル）で構築されている。この弾丸を受ければ、彼らはたちまち泡に包まれてその身を崩れさせる。

彼は銃の腕前に自信があった。そして彼は艦娘がどういうものか、よく熟知しているつもりだった。彼は元々軍属であり、今では完全な崩れだが、陸に上がっ

た艦娘程度ならば人間でも十分に太刀打ちができることを知っている。結局のところ、奴らに期待されているのは人間の代理以上のものではない。

今のところ侵入者の艤装の有無の報告は受けていない。だが非合法な改造を施されたこの双子は、過去に完全装備の重巡洋艦クラスを屠った実績もある。

艦娘であれば、調教して屈服させて、新たな手駒に加えるか、もしくは商品にしても良いかも知れなかった。どんなに人間より優れた力を持とうが、結局は生き物であることには変わりなく、そして人間並みの知性を持っていようとも、定められた組織外では彼ら被造物の社会的立場は限りなく低い。

完全な機械式のロボットなどと違って飯を食わなければならないし、そのあたりの飼い方は人間と全く変わりはない。むしろ見てくれのケアが不要な分、商品としては経済的だというのが彼にとっての艦娘への評価だった。

そして男と少女たちのアドレナリンに充満したエレベータが、目的の階に到着する。

扉が開く。薄暗い、コンクリートが打ちっぱなしのフロア。

「行け狗ども！」

鳥籠男の号令が、その空間に響き渡る。

「そして奴らに、てめえが飛び込んだ鳥籠の恐ろしさを思い知らせてやれ！」

その言葉が終わるや否や、

「――クッ！」

「くっ――！」

撃ち出された魚雷のように双子は外へ飛び出した。

2

一番の少女(イー・ザ・ブレイク)と、二番の少女(アー・ザ・エコーズ)は、ステージでのショウタイムの最中に状況を知った。
姉妹である三番(スウ)からの並列思考共有処理。曰く、侵入者が四匹。
お楽しみを邪魔されたオーナーが怒り心頭。
これから自分たちを連れて掃討に向かう。Sorry, oh, mai Sorry お生憎様？

定められた振り付けに従って身体を揺らしながら、二人は顔を見合わせる。

薬物でトリップしかけた脳髄。瓜二つの顔に、ショウタイム用の淫靡な笑みを浮かべたまま。しかしお互いが何を考えているのかは判る。お生憎様(Sorry, oh no! Sorry)、――今すぐにステージを飛び降りて武器を手に取り、掃討作戦に加わりたかった。

だがそれが主人(オーナー)の采配では仕方がなかった。

非適性の解体待ちだった自分たちを買い取って、居場所と食事と仕事を与えてくれた飼い主。たとえそれが鳥籠(ケージ)の中であろうとも、水槽(アクアリウム)の中よりは幾分かマシだった。本来は戦う為に造られた身体を、違う目的で用いるように言われても、生き延びるためには従う他なかった。

だからこそ、稀に訪れる機会を逃すのが本当に惜しかった。自分たちの本能に従って武器を手に取り、立ちはだかる敵を薙ぎ倒していく。それはどんな強烈な

薬物も、どんな性的刺激も与えてくれない、特別なエクスタシーを感じさせてくれる瞬間。

自分たちがそうあることを想像して、二人は下腹部がじんと熱くなるのを感じる。その陶酔の感覚に、先程よりも熱さ、艶かしさを増した二人へ、オーディエンスからの今にも飛びかからんばかりの熱量が浴びせかけられる。

そうしてショウのテンションが最高潮に達した時だ。

一瞬の酩酊するような陶酔から目を醒ました二人はふと、奇妙なことに気がついた。

かき回される空気が触れる興奮の中で敏感になった肌が、大音量のミュージックの中にありながらも鋭敏さを保つ艦娘の聴覚が、その違和感を告げていた。

ステージに、自分たち以外の誰かがいる。

時々、彼女たちの煽りに当てられて我を忘れた観客が、ステージ上へ登ってくることはあった。だが、今日の客たちはいつもより比較的冷静で理性的な様子だった。少なくとも、ショウの後に予定されているアフタータイムまで、その猛りを抑えていられる程度には。

しかし、二人が注意深くステージ上を探しても、その姿は視えなかった。いくらその他の感覚がそう告げていても、肝心の視覚がその存在を認めようとしない。

そうして曲が一巡し、違和感にもだんだん感覚が慣れてきた頃だ。

次の音楽のイントロとともに、突如、観客たちから脈絡のなく大きな歓声が上がる。

距離をあけて別々の方向を見ていた二人は、はっとなる。

振り付けを無視して視線をステージの中央へ向ける。

そこには、探していた違和感の正体が立っていた。
ぶかぶかで丈が長いセーラーカラーのワンピース。
子犬を思わせる形のアッシュグレイを帯びた黒髪。
くりくりとした愛らしい瞳を歪ませたその表情は、薬物でトリップしている二人よりも遥かに淫蕩。タイツで包まれた足の曲線を、音楽に合わせて艶かしく揺らす。
生まれながらの妖婦（ナチュラルボーン・ハーロット）を思わせる動き。
新商品の登場に、今までにない盛り上がりを見せる観客。
少女は呆気にとられた二人を置き去りにして、客の期待する通りに舞い動く。
その淫靡な笑顔が交互に向けられて、二人は自分たちの役割を思い出し、混乱したまま予定外の三人目を加えてダンスを再開する。

あるいは、この少女は本当に、自分たちと同じ新しい商品なのだろうか。それにしても一体この少女はどこから現れたのか。いつの間にステージにあがったのか。どうしてこんなにも軽やかに、合わせた覚えのないステップを、自分たちと息ぴったりに踏むことが出来るのか。

かき乱された思考に苛まれる二人の間で、少女はゆっくりと、ワンピースのボタンを外していく。みるみるうちに露出していく白い腹。下着一つつけていない、なだらかな乳房の下端が姿を顕したところで止める。

その下には汚い文字で挑発的な落書き。

左の乳房、――私のことを見て！（LOOK AT ME）

右の乳房、――私の声を聞いて！（LISTEN TO ME）

突然、喚き声があがる。

二人が視線を送る。観客席からステージへ男が一人這い上がっている。

周囲の静止を振り切り、あるいは興奮した他の観客の後押しを受けて、泥酔し、欲情を抑えきれない男はつんのめりながらステージの中央へ、少女へと突進する。

踊りながら二人はオーナーの命令、――行儀の悪い客は舞台から叩き落とせ、――を思い起こし逡巡する。しかし狙いは自分たちではない。

だがそう思うも束の間、迫り来る男のタックルを、少女はひらりと軽やかに躱す。脱ぎかけのワンピースをはためかせ、研ぎ澄まされた闘牛士のような動き。そして観客へと投げキス。男はステージ上でたたらを踏んで無様に倒れ込む。少女がその背を蹴りつける。男が汚い声をあげて悶絶。歓声がヒートアップする。

バックダンサーと化した二人に、姉妹からの一方的な通信。それを受けた二人は目を見開く。唾を飲み込む。歓喜の笑みを浮かべる。

――侵入した四匹のうち二匹と邂逅。残りは別の場所にいる。
映像から解析した侵入者の一匹の特徴。
ぶかぶかで丈が長いセーラーカラーのワンピース。
子犬を思わせる形のアッシュグレイを帯びた黒髪。
ほぼ間違いなく艦娘。
主人からの命令、――可能ならば生け捕りにし、鳥籠へ持ち帰れ。
二人は即座にフロア中のスタッフへ無線通信。
ステージ上に侵入者あり。ステージに群がるお客様の安全確保を呼びかけながら、二人はそれぞれ侵入者への準備を始める。
一番の少女は自身の滑らかなもに手を這わす。右足に巻きつけられたリボン。
そこにはホルスターが仕込まれている。そこから引き出す。握り締める。踊りな

がら伸長する。スイッチを入れた伸縮性のスタンロッドが青白い火花を放つ。そのしなるロッドは徹底的に、殴りつけるものを破壊（ブレイク）する。

二番の少女（アー・ザ・エコーズ）は尻を突き出し、冗談のように短いスカートに手をいれる。その裏地に重し代わりに差し込まれていたブラスナックルを取り出す。踊りながら両手に嵌める。表面に埋め込まれたアクアマリンがスポットライトにきらきら輝く。その両拳は殴りつけるものへリズミカルに衝撃（エコーズ）を叩き込む。

流血は禁止。流れ弾は禁忌。

凶器。その登場に、観客は煽り立てられた本能に従ってただ歓ぶだけだ。

それは普段から催し物の一つとして行われている拷問ショウ。古株の二人が何も知らずステージへ放り込まれた新人を、壊れない程度にいたぶる内容。いつもより早いが、常連客にとっては見慣れた流れ。誰もがそれをいつものショウの準

備であり、これから本当に生命を脅かす目的で、その武器が振るわれるとは思っていない。

事実二人もそのように振る舞った。二人は凶器を光を放つアクセサリのように見せびらかしながら中央へ、こちらを見ない少女へと距離を詰める。麗しの人造的美貌に振るわれる暴力の予感に、観客から期待の悲鳴が上がる。

間近に迫り、ようやく少女がこちらを向く。二人が握る凶器を初めて視認する。その顔に浮かぶのは恐怖ではない。「だから何？」と問うような顔。挑発するように舌を出す。闘争を望む二人にとっては、望む通りの反応。

一番（プレイク）と二番（エコーズ）が同時に動く。

ミュージックが間奏に差し掛かる。

ショウタイム。

横薙ぎに振り抜かれるスタンロッド。少女に火花の飛び散る鋒が迫る。
少女は胸を逸らす。すり抜ける。流石に訓練された動き。
一番は手応えの有りそうな獲物に空振りでも嬉しそうに興奮した声を漏らす。
その横腹へ放たれるのは二番（エコーズ）のボディブロー。これもまともには当たらないだろう。まだまだお楽しみはこれからだ。二人はそう思っていた。
「!?」
見間違いかとはじめは疑った。
だが、二番の拳は正面から、少女の鳩尾に命中した。少女は不可解にも、回避ではなく直前にくるりと身を捻ったように見えた。
「かっ……」
漏れ出す呼気。二番（エコーズ）の拳に、少女の腹部の弾力と内蔵を押し潰す感触が伝播（エコー）する。

浸透する振動（エコーズ）は内蔵をシェイクする。
その得意気なステップが立ちどころに停止する。
前屈みに差し出されたその背中に容赦なく、一番（ブレイク）のスタンロッドが振り下ろされる。
観客からの悲鳴。歓声。
激しい打擲音。迸る火花。背中へのクリーンヒット。
一番（ブレイク）はその手に、相手の背骨を破壊（ブレイク）した手応えを得る。
呼吸を阻害された少女の身体が崩折れる。先程の酔客のようにステージへ無様に膝をつく。その場で少女はげえげえと咳き込みながら唾液を吐き出す。
湧き上がる周囲からの拍手、口笛、野次。
「……、……？」

だが二人はこっそりと、当惑の表情で顔を見合わせる。あまりにも弱すぎる。予想した反撃がない。あまりにも拍子抜けの流れだった。昂ぶらせた闘争本能が行き場を失い、二人は泣きそうな気持ちにさえなる。

このままで終らせるわけにはいかない。せめてもっと悲鳴をあげてもらわなくては、観客の興を削ぐ。それはオーナーが一番嫌うことだった。

そして不意に、観客からどよめきがあがる。

二人は何事かと周囲を見渡し、足下を見る。

「――――!?」

目の錯覚ではない。見落としでもない。

少女は生々しい吐瀉物の痕跡をステージに残し、魔法のように姿を消していた。だがいつ消えたのか。二人は互いに向き合っており、死角は足下か天井だ。

すぐに二人で同時に上下を見渡したが、その姿を発見することが出来ない。
その一瞬の戸惑いが命取りだった。
パン、と乾いた木が爆ぜるような音が響いて、一番の身体が崩れ落ちる。スタンロッドを取り落とす。それを目にした二番も当の本人も、何が起きたか理解していない顔。
パン、パンと続けて同じ音がする。
二番の足下、床に二つの小さな穴が生じる。
そこで二番は何が起きているのか気が付き、飛び跳ねるようにその場を離れる。
流血は禁止。流れ弾は禁忌。
そのルールは、あくまでステージ主催側のもの。
「ぱら、ら、ぱらら、ら」

姿が見えないゴーストからの歌うような声に載せて連続する音。
走る二番を追いかけるように、ミシン目のような弾痕が刻まれる。
数秒の遅れを経て、観客たちも一番の足から流れる血液、そして連続する破裂音の正体が、へたくそな射撃であり、それが全くショウの演出というわけではないことに気がつく。
次々と悲鳴をあげて、倒れ込むように逃散する観客たち。
それをかき分けるようにして集まってくる、フロアスタッフの少女たち。
黒のスーツスタイル、あるいは先程まで客に侍っていた扇情的衣装のまま、共通なのは、その手に携えている無骨な短機関銃だ。
唸り声をあげながら、一番が歯を噛み締めて半身を起こす。
右足に巻着付けられたリボンから注射器を引き抜く。

それを自身の足、銃弾を受けた傷口の近くに突き刺す。注射する。
濃縮された高速修復剤が、直ちにその効力を発揮する。
本来は拷問ショウの時にうっかりやりすぎた時に使うもの。
生体型自律機械の身体構成材料である、微細資源（フェアリースケイル）の自己修復機能を急激に促進させる。
銃創が煙のような泡を噴き上げながらみるみるうちに塞がる。潰れた弾頭が血液とともに吐き出される。
その間に射撃が止む。立ち上がった一番は、二番とアイコンタクト。
注射器を捨て、取り落としたスタンロッドとは別に、腰元のシザーバッグから第三の道具、――拷問用の使い捨て薄刃メスを引き抜く。指の間に挟み込むように三本。

二番も拳を余念なく構える。ステージを取り囲むようにしてフロアスタッフが集まる。ステージ上へ銃口を向けて、姿が見えない射手の姿を探す。

その瞬間、スポットライトが点灯する。

集まった白い光の中に浮かび上がるのは、黒髪の少女の姿だった。

まるで先程のダメージは何一つ残っていないかのように悠然とした構え。

右手にはその華奢な手指には余る大型のオートマチック。

「ぱら、ら、ぱらら、ら」

歌うように告げながら少女はステージ下、フロアスタッフたちへ向けて銃爪を引く。

先を越された彼らは襲いかかる銃弾の雨を想像し慄いた。

しかしその直後、かちん、という間の抜けた音が響く。

「ありゃ？」
呆けた声をあげて少女が銃口を覗き込む。
二度三度と銃爪を引く。
かちんかちんという軽い音。弾は出ない。
悪戯を見破られた子どものような、ばつの悪そうな無垢な笑みが浮かぶ。
「弾切れちった！」
次の瞬間、容赦のない銃弾の雨が、少女の身体に降り注いだ。
半円状にステージを取り囲む十を超える短機関銃から、艦娘殺しの解体弾が放たれる。
トタン屋根を叩く雨粒のように、弾丸が次々と小さな体を撃ち抜く。その度に、先程のダンスよりもぎこちないステップで、少女の身体がびくびくと跳ね上がる。

オーナーの命令(オーダー)を思い出し、一番と二番が、暴走するフロアスタッフたちへ静止を指示する。弾丸の雨が止み、支えを失った案山子(スケアクロウ)のように、少女の身体が仰向けに倒れ伏した。

発砲への興奮を滲ませたフロアスタッフたちの口笛、歓声。

一番と二番は緊張を保ちながら、転がった身体に近づいていく。

それはもはや、ボロ雑巾といっても差し支えがない程の有様だった。

全身が撃ち抜かれ、孔だらけの血塗れだった。もはやどこが眼で、どこが鼻だったかも定かではない。どう見ても息があるようには見えず、明らかな過剰攻撃(オーバーキル)。解体弾がその効果を発揮して、撃ち抜かれた箇所が分解され、徐々に泡になりかかっていた。

一番と二番はため息をつく。

ショウは中断。生け捕りは失敗。

この有様では固着処理を施したところで剥製人形にすらならない。

この失態に対して、オーナーの機嫌を取り戻す為には、果たしてどれほどの手厚い奉仕が必要だろうか。考えるだけでも気が遠くなった。

二人は並列思考共有を介して、侵入者を排除した旨を姉妹へ伝達する。

そしてせめて証拠を残す為に、フロアスタッフへ固着剤の手配を指示しようとしたところで、二人は再び思考停止に追い込まれる。

死体がない。

「ばぁっ！」

背後からの大声。

振り返ると、そこには死体が立っていた。

「――ッ!?」

まるで無数の鳥に啄まれた案山子のような有様、

全身から血の泡を吹き出しながら、その死体は立っている。

死体は孔だらけのまま動く。

死体は流れるような動作で空っぽの弾倉を捨てる。

死体はどこからか取り出した新しいものを装填する。

死体がスライドを引くと弾丸が装填される。

二人は転がるように飛び退く。死体が銃爪を引く。

死体がケタケタ笑う声に合わせて、ステージ下へ弾丸が掃射される。秒間二〇発の弾丸の雨が、まるでお返しとでもいうようにフロアスタッフたちへ降り注ぐ。

照準を合わせる気のないへたくそなフルオート射撃。反動でブレる腕を抑えよう

ともしない。悲鳴をあげる間もなく、スタッフの大半が薙ぎ払われた。
すぐにかちんという音とともに、射撃が止む。
そのほんの二秒の間に、一番と二番は己が武器を振りかざしていた。
一番（ブレイク）のメスが死体の首筋に突き立てられる。血の一滴も吹き出さない。持ち手の半ばまで差し込まれた刃は脊椎にまで至る。明らかな致命傷。
二番（エコーズ）の拳が死体の顔面を殴る。右眼が衝撃で飛び出す。アクアマリンが頭骨を砕いてめり込む。そのダメージは脳髄に及ぶ。明らかな致命傷。
衝撃を受けた死体が吹き飛ぶ。ステージの上をバウンドして転がる。
だが息を荒げた二人の眼の前で、その死体はまるで発条仕掛けのように立ち上がる。
脊椎に突き刺さったメス。それは吹き出した泡によって押し出されてからんと

落ちる。傷口は瞬く間に塞がって、鮮血も泡となって蒸発する。

飛び出しかけた眼球。それは逆再生のビデオ映像のように、砕けた頭骨とともに見る見るうちに修復される。

だらりと流れ落ちた血液を、泡塗れの舌がぺろりと舐めとる。銃を捨て、その小さな手がほこりを払うように身体を叩くと、それだけで全身から彼女に撃ち込まれた弾丸が、まるで霰のようにぼろぼろと流れ落ちる。

まるで雨に濡れた子犬がそうするように身体を振ると、ボロボロの皮膚が服だった布切れと一緒に脱皮のように剥がれ落ちる。その下からつるつるの傷一つない瑞々しい素肌が現れ、彼女は艶かしくしなを作りながら残る屑をを払う。

まるでコモンスペースで配信されている出来の悪いホラームービー、あるいはクレイアニメの一幕のような、幻想的で悪趣味な光景。それは実際のところ、先

程一番(ブレイク)が用いた高速修復材の効果と、全くそっくりの現象だった。

だが、その効果はあまりにも違いすぎる。そして強力過ぎる。一番はごくりと唾を飲み込む。一体いつの間に、少女がそれを自身に投与したのか解らない。第一、致命傷を受けた絶命状態からさえも、即座に復旧させてしまう修復剤など聞いたことがない。

そうして二人の目の前で、少女は無傷の状態で復活する。

身につけていたぼろぼろの衣服は、もはや完全に脱ぎ捨てられた。ところどころがまだ泡にまみれた美しい肌。彼女は裸足で二、三歩ほどスキップする。

そしてくるりとこちらへ振り返る。

「ばうばう」

あどけない微笑みと、犬の鳴き真似。

起伏の少ない少女の肢体。反らされた上半身に揺れる胸の稜線。
その下には汚い文字で挑発的な落書き、その全てが露出する。
左の乳房、――あなたはただ見ているだけなの？（YOU CAN LOOK AT ME）
右の乳房、――あなたのその手で私を鳴かせて？（YOU CAN LISTEN TO ME）
原理不明の不死身（アンデッド）の怪物。
悪夢（ナイトメア）のような光景を前にした二人は、一瞬紛れもない恐怖を心に抱く。
同時に、周囲が騒がしくなっていることに気がつく。蜘蛛の子を散らすように逃げ出したフロアスタッフの連中が、頭上を飛び交う何かに襲われ、追い立てられていた。それはまるでドローンのようなミニチュアの飛行機。恐らく、航空母艦に相当する艦娘によるもの。自分たちがこの怪物に引きつけられている間に他の侵入を許してしまっていた。彼女たちは自らの失態を噛み締めながら眼の前の

異常な敵に対峙する。

自分たちのショウタイム用の装備では、もはや完全な排除は不可能な相手。

一番と二番はすぐに、並列思考共有を通じて姉妹に応援要請を出していた。

――だが返答は、一切なし。NO SIGNAL 常に繋がり続けているはずの四姉妹の絆は、気づかない間に何者かによって断ち切られていた。

あるいは、そもそも最初からだ。二人はようやく自分たちが、棲家であるはずの鳥籠の中で窮地に立たされていることに気がついた。

震える手足が生存本能に従い、直ちの逃走を訴えていた。

だが、彼らは逃げ出しても、自分たちに行き場がないことを十分に知っていた。

だから彼らは戦闘の構えをとる。敵が無制限に再生する怪物なら、それはそれで対処方法を考えるだけだった。それにこれを見事捕らえれば、オーナーも大喜

びするだろう。

不退転の精神。それは紛れもなく彼女たちが本来、勇敢な兵士としての役割を果たすために造られた証だった。

そして彼らは、久しく耳にしていなかった、自分たちの中に響くさざ波の音を聞いた。

それは本当に久しぶりの、――彼らが適性検査にて初めて深海棲艦の実物を目の当たりにした時、あるいは悪性変異をしかかった仲間をオーナーの指示で処分した時に、聞こえてきた言葉。

――目の前の敵を倒せ。
Destroy your Enemy!

――これは我々に害を為すものだ。
This is our Enemy!

――それを倒す事がお前たちの役割だ。
Destroying the Enemy. It's Our Mission!

さざ波の中の声はそう囁きかけ、彼らの精神を鼓舞していく。対する少女の手には、いつの間にか一番が取り落としたスタンロッドが握られていた。

スイッチが入れられる。空気を灼いて飛び散る火花。

「さあて、それじゃあね」

その閃きに照らし出されるのは少女のにやにや笑い。

「――ぶっ叩くよ！」

それはまるで耳から耳まで届くような、御伽話の猫のような笑みだった。

＊